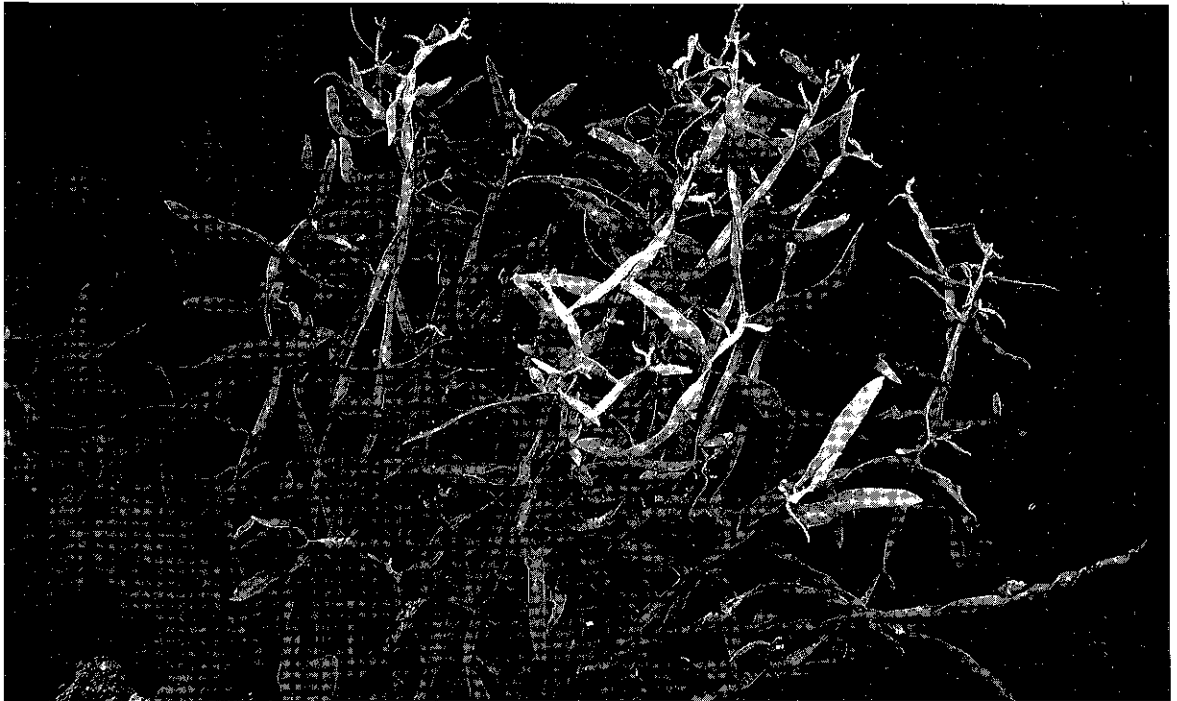


串本海中公園 マリンパビリオン

2006. 7

Vol. 35, No. 4



ネジモク

Sargassum sagamianum

大変特徴的な外観を持つホンダワラの仲間で、その名前通り茎の部分がねじれている。付着器は大きくて円錐状、体は長さ1 mほどになり、主枝の部分は三稜形で良くねじれる。葉は細長く、先端が尖り、粗い鋸歯を持つ。葉の長さは5 cm前後、幅は5 mm位である。葉の中央を通る中肋は先端まで達しない。葉は茎の周りにらせん状に配置される。気泡の数は他のホンダワラ類に比べて少なく楕円形もしくは紡錘形で、長さは15 mm前後、先端に突起か細くて長い葉を持つ。波あたりの強い岩礁地帯の浅い場所にしか生育せず、潮間帯付近から深くとも水深2 m前後にしか産しない。付着器が大きくて丈夫なのはこうしたわけだろう。本種は元々ネジモクとして太平洋沿岸に広く分布するものとされてきたが、吉田(1980)がその後3タイプであることを突き止め、タイプ標本として本種を選定、本タイプを「ネジモク」とした。本種の分布は、紀伊半島のみとなる。写真は串本町古座の水深1 mの岩礁帯で撮影したもの。ホンダワラ目。 S.U.

串本海中公園センター

串本のサンゴ群集 (15)

総括：2. サンゴ相、被度、重要群落
野村 恵一

串本のサンゴ群集の総括として、前回 (Vol. 35, No. 2) は種数、出現頻度や代表種 (優占種) について紹介した。本シリーズの最終回となる今回は、サンゴ相や被度、重要群落などについて述べる。なお、表 1 に各種の出現頻度を示した。前回の評価と併せて参照されたい。

サンゴ相

表 1 に著者が串本で確認できた造礁性サンゴ類の種目録を示した。串本産種は合計 121 種に上り、この中には昨年、立川浩之氏によって当地で初めて採集されたカービーエダサンゴなど、最新の知見が入っている。

西平孝博士と J. E. N. Veron 博士は串本での直接調査結果を含めた、日本産全種を掲載したサンゴ図鑑を著した (西平・Veron, 1995)。本著によれば、串本から 95 種が記録されているが、表 1 とは組成がだいぶ異なっている。その理由としては、調査努力量の違いや、両博士の調査以降、暖冬化により串本のサンゴ相が変化したこと (後述する) が挙げられる。また、両博士の記録種の中には、本調査から 15 年が経った今でも、当地で全く再確認ができない種が 20 近くもある。これは、資料の誤認か種の見解の相違があったものと考えている。

被度と種数分布

図 1 に串本町南西岸におけるサンゴの被度と種数分布を示す。被度は 2003 年に実施したマンタ法による目視調査結果、種数は 2000 ~ 2003 年の間に 100m もしくは 200m 長の側線を使用したライントランセクト法による定量調査結果に基づいた (野村他, 2005)。

被度 50 % 以上の高密度群集は潮岬中央 (波の浦) 以西に限られ、波の浦より東では見られない。図 1 に示した種数は、調査側線下のみの出現数であるが、海域の種数分布の傾向をよく表している。すなわち、潮岬以西、特に錆浦周辺は種多様性が高いが、潮岬より東側では低い。

このように、潮岬を境にその西側 (枯木灘側) ではサンゴの量は豊かで種多様性も高いのに対し、東側 (熊野灘側) では量は少なく種多様性も低い。これはサンゴのみに限らず、熱帯性の生物群全てに共通する現象であり、その原因は黒潮の影響度の相違にある。枯木灘側では、黒潮とその分枝流 (紀南分枝流) によって、常に清澄で温暖、かつ高塩分の環境が形成されているが、熊野灘側では黒潮が沖を流れ去るため、黒潮に代わって、より低水温・低塩分の熊野灘沿岸水の影響を受けているからである。

新規加入種

本シリーズで度々紹介してきたが、1990 年代初頭から継続傾向にある暖冬化現象は、これまで当地で越冬できなかった南方系サンゴの定

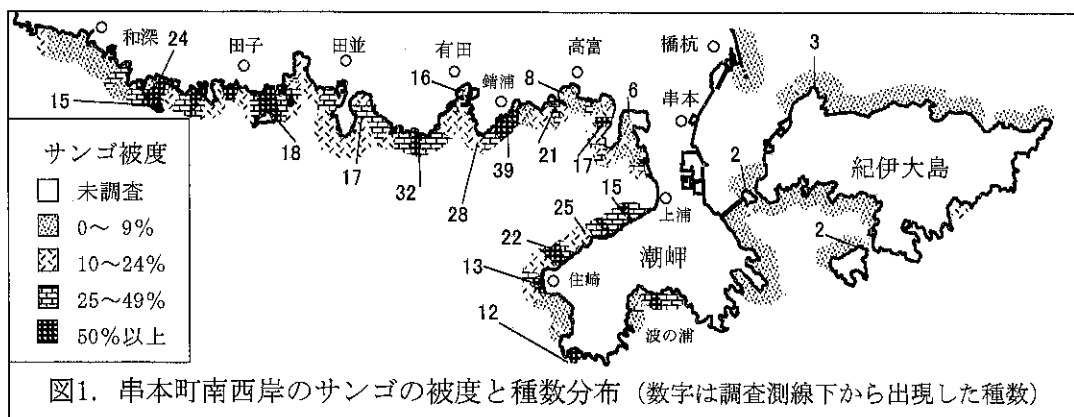


図1. 串本町南西岸のサンゴの被度と種数分布 (数字は調査測線下から出現した種数)

着を促進している。1990年代以降になって当地で初めて確認されるようになった種は、1995年のショウガサンゴの発見（本紙 Vol. 25, No. 9）を皮切りに、サオトメシコロサンゴ、サザナミサンゴ、マルアナハナガササンゴ、リュウモンサンゴ、スギノキミドリイシ、ヒラニオウミドリイシなど28種（23%）にも上っている（表1）。この中で特に増加が著しいのがスギノキミドリイシで、これまで串本では乏しかった枝状のサンゴ景観が、本種の増加のおかげであちこちで見られるようになった。

重要なサンゴ群落と保全指定域の追加

環境省は串本浅海域の自然資質を再評価する目的で、2002～2004年にかけて海域調査を実施し、自然景観や生物群集の資質が総合的に特に優れた、保全上重要な11地点を選出した（図2）。この中には、サンゴ群落の評価対象となった地点が9つも含まれ、本調査結果は、サンゴ群生域のラムサール条約湿地への登録（2005年11月）や、通夜島北岸（希少種オオナガラハナサンゴの国内最大規模の群生域）の海中公園地区追加指定（2006年1月）へとつながった（図2）。なお、11の町内重要保全地点のうち、双島や横島はラムサール登録域に含まれていないが、これは、単に登録の条件である「国立公園内にあること」を満たしていなかったた

めである。

まとめ

串本のサンゴ群集を簡潔に評価すれば、本州という高緯度に位置しながら、種多様性や被度が高く、さらに、それが長期間にわたって本質的に変化することなく保たれていることである。近年、国内のほとんどのサンゴ群生域が、環境悪化やオニヒトデの食害、高水温などによって、少なくとも1回は壊滅的な被害を受けていることを考えれば、串本沿岸は奇跡的に残された世界最北のサンゴの海と言うことができる。しかしながら、この海もオニヒトデや度重なる大型台風によって、サンゴ量の低下が進んでいる。さらに、上述したように、暖冬化によってサンゴ群集構造に変化が認められている。この変化が地球温暖化に関連しているとすれば、南方系種が増加する「海域の熱帯化」は避けられないであろう。ただし、例えこれが進み、また、サンゴが一時的に被害を受けたとしても、自然環境が良好に保たれてさえいれば、サンゴ自体が持つ早い成長力によって見事な回復を見せ、串本は魅力的なサンゴの海であり続けることは間違いない。いかに環境を良好に保ちながら、自然財産を賢明に利用していくか、ラムサール条約のこの理念が、本登録をきっかけにしてこの町に深く根ざしてくれることを期待してやまない。

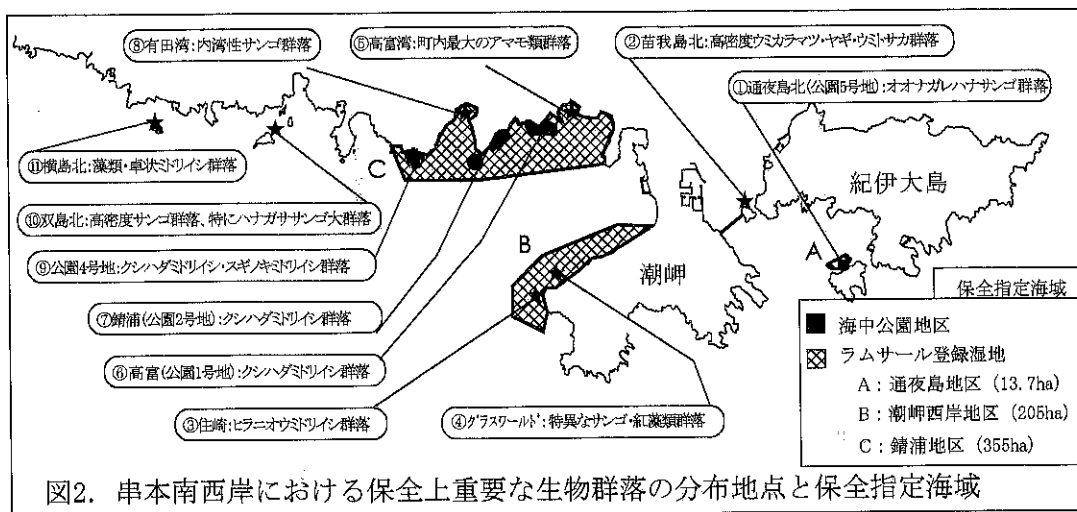


表. 串本で確認された造礁性サンゴ類とその出現頻度ならびに分布北限種

・頻度 (出現頻度) 希: 希少、少: 少産、普: 普通、多: 多産 ・加入: 1990年代以降に新たに確認された種

頻度	加入	種名	頻度	加入	種名
希		アサノエダサンゴ <i>Madracis asanoi</i>	多		キッカサンゴ <i>Echinophyllia aspera</i>
希	○	カービーエダサンゴ <i>Madracis kirbyi</i>	普		ウスカミサンゴ <i>Mycedium elephantotus</i>
普		ムカシサンゴ <i>Stylocoeniella guentheri</i>	希		アナキッカサンゴ <i>Oxypora lacera</i>
普		ハナヤサイサンゴ <i>Pocillopora damicornis</i>	希		ウミハラ <i>Pectinia aylei</i>
希	○	ショウガサンゴ <i>Stylophora pistillata</i>	普		ヒメオオトゲキクメイシ <i>Acanthastrea echinata</i>
普		ヒラエオウミトリス <i>Acropora cuneata</i>	少		ヒラタオオトゲキクメイシ <i>Acanthastrea hemprichii</i>
希	○	コエビトリス <i>Acropora digitifera</i>	少		オオトゲキクメイシ <i>Acanthastrea hillae</i>
希	○	ヤッコトリス <i>Acropora divaricata</i>	少		カクオオトゲキクメイシ <i>Acanthastrea lordhowensis</i>
普	○	スキノキトリス <i>Acropora formosa</i>	希		オオトゲキクメイシの一種 <i>Acanthastrea</i> sp.
希	○	オキエビトリス <i>Acropora gemmifera</i>	希	○	ヒラサンゴ <i>Australomussa rowleyensis</i>
多		クシハダトリス <i>Acropora hyacinthus</i>	希		ヒラサンゴの一種 <i>Australomussa</i> sp.
多		コホントリス <i>Acropora japonica</i>	少		オオタバサンゴ <i>Blastomussa wellsi</i>
希	○	コエダトリス <i>Acropora microphthalma</i>	希		コハナガタサンゴ <i>Cynarina lacrymalis</i>
希	○	トリスの一種 <i>Acropora</i> aff. <i>samoensis</i>	希		ハラオハナガタサンゴ <i>Lobophyllia hataii</i>
普		エンタダトリス <i>Acropora solitaryensis</i>	少		オオハナガタサンゴ <i>Lobophyllia hemprichii</i>
普		エダトリス <i>Acropora tumida</i>	普		アモクサオオトゲキクメイシ <i>Micromussa amakusensis</i>
普		ホソエダトリス <i>Acropora valida</i>	希	○	ヒロクチガイノウサンゴ <i>Symphyllia agaricia</i>
少		コシバトリス <i>Acropora willisae</i>	少		ダイノウサンゴ <i>Symphyllia radians</i>
普		センバイアササンゴ <i>Asteropora incrustans</i>	少		ハナガタサンゴ <i>Symphyllia valenciennesii</i>
少		デーナイボコモンサンゴ <i>Montipora danae</i>	少		ボンサイイボサンゴ <i>Hydnophora bonsai</i>
普		コモンサンゴの一種 <i>Montipora effusa</i>	多		イボサンゴ <i>Hydnophora exesa</i>
希		シモコモンサンゴ <i>Montipora efflorescens</i>	少	○	ササナミサンゴ <i>Merulina ampliata</i>
少		トゲコモンサンゴ <i>Montipora hispida</i>	少		ハラハットサンゴ <i>Barabattoia amicorum</i>
希	○	コモンサンゴの一種 <i>Montipora incrassata</i>	普		タバネサンゴ <i>Caulastrea tumida</i>
希		リコモンサンゴ <i>Montipora informis</i>	普		コケキクメイシ <i>Cyphastrea chalcidicum</i>
少		ミレボラコモンサンゴ <i>Montipora millepora</i>	少		コホントゲキクメイシ <i>Cyphastrea japonica</i>
普		モリスコモンサンゴ <i>Montipora mollis</i>	普		トゲキクメイシ <i>Cyphastrea microphthalma</i>
希	○	コモンサンゴの一種 <i>Montipora</i> cf. <i>monasteriata</i>	多		フカトゲキクメイシ <i>Cyphastrea serallia</i>
希	○	イダアコモンサンゴ <i>Montipora peltiformis</i>	少		スズミキクメイシ <i>Favia fava</i>
少		カタコモンサンゴ <i>Montipora spongodes</i>	少		ウモレキクメイシ <i>Favia helianthoides</i>
希	○	ウネコモンサンゴ <i>Montipora undata</i>	普		リザードキクメイシ <i>Favia lizerdensis</i>
少		コモンサンゴ <i>Montipora venosa</i>	少	○	ロツマキクメイシ <i>Favia rotumana</i>
希		ニホンアワサンゴ <i>Alveopora japonica</i>	少		アツキクメイシ <i>Favia rotundata</i>
少		アワサンゴの一種 <i>Alveopora</i> sp.	普		キクメイシ <i>Favia speciosa</i>
少		キタメナガササンゴ <i>Goniopora djiboutensis</i>	○		アハレキクメイシ <i>Favia veroni</i>
普		ハナガササンゴ <i>Goniopora lobata</i>	普		カメノコキクメイシ <i>Favites abdita</i>
少		ユレハナガササンゴ <i>Goniopora pendulus</i>	少		カケノコキクメイシの一種 <i>Favites complanata</i>
少		コハナガササンゴ <i>Goniopora stutchburyi</i>	普		オオカメノコキクメイシ <i>Favites flexuosa</i>
少	○	マルアハナガササンゴ <i>Goniopora tenuidens</i>	○		マルカメノコキクメイシ <i>Favites halicora</i>
普		ハナガササンゴの一種 <i>Goniopora</i> sp.	普		ゴカキクメイシ <i>Favites pentagona</i>
多		フタマタハマサンゴ <i>Porites heronensis</i>	多		バリカメノコキクメイシ <i>Goniastrea aspera</i>
少		ハマサンゴの一種 <i>Porites</i> cf. <i>licken</i>	多		ウネカメノコキクメイシ <i>Goniastrea australiensis</i>
希	○	フカアハマサンゴ <i>Porites lobata</i>	多		シダレカメノコキクメイシ <i>Goniastrea deformis</i>
普		ゴアハマサンゴ <i>Porites lutea</i>	普		トゲルリサンゴ <i>Leptastrea pruinosa</i>
普		ヤスリサンゴ <i>Coscinaraea columna</i>	少		ルリサンゴ <i>Leptastrea purpurea</i>
少		ノマヤスリサンゴ <i>Coscinaraea crassa</i>	普		マルキクメイシ <i>Montastrea curta</i>
希	○	トゲアミサンゴ <i>Psammocora halmeana</i>	多		タカキクメイシ <i>Montastrea valenciennesi</i>
少		アミサンゴ <i>Psammocora profundacella</i>	少		キクメイシモドキ <i>Oulastrea crispata</i>
普		ベルベツトサンゴ <i>Psammocora superficialis</i>	少		オオナガラサンゴ <i>Oulophyllia crispata</i>
希	○	センバイイサンゴ <i>Leptoseris explanata</i>	多		チヂミノウサンゴ <i>Platygyra contorta</i>
少		アバタセンバイイサンゴ <i>Leptoseris mycetoseroides</i>	希	○	シチノウサンゴ <i>Platygyra sinensis</i>
希	○	リュウモンサンゴ <i>Pachyseris speciosa</i>	普		コマルキクメイシ <i>Plesiaastrea versipora</i>
少	○	サトメシロサンゴ <i>Pavona cactus</i>	少		ナガラハナサンゴ <i>Euphyllia ancora</i>
普		シロサンゴ <i>Pavona decussata</i>	少		オオナガラハナサンゴ <i>Catalaphyllia jardinei</i>
少		ヒラシロサンゴ <i>Pavona explanulata</i>	少		ウネスリハチサンゴ <i>Turbinaria frondens</i>
少		ハマシロサンゴ <i>Pavona minuta</i>	希		ツツスリハチサンゴ <i>Turbinaria irregularis</i>
少	○	ワシシロサンゴ <i>Pavona varians</i>	少		スリハチサンゴ <i>Turbinaria mesenterina</i>
希		マンジョウイシの一種 <i>Cycloseris patelliformis</i>	普		オオスリハチサンゴ <i>Turbinaria peltata</i>
希		マンジョウイシモドキ <i>Cycloseris vaughani</i>	少	○	ヨコヅスリハチサンゴ <i>Turbinaria reniformis</i>
希		ワレサビライシ <i>Diaseris distorta</i>	希		クダサンゴ <i>Tubipora musica</i>
普		カワラサンゴ <i>Lithophyllon undulatum</i>			合 計121種

トンネル水槽でのクロマグロ展示

小寺 昌彦

トンネル水槽は 1988 年のオープン以来サメ・エイ類のような大型魚類の展示を行ってきた。それから 18 年、大きく成長したサメとその捕食によって新しい飼育生物の追加に制限が大きくなり、展示生物が単調化し、生物数も減る一方であった。そこで、展示テーマを大きく変える目的で、サメ・エイの取り出しを行って、暫定的にウミガメ類 3 頭を展示し始めた。

その後、次期主役生物はクロマグロと決定した。クロマグロは誰でも知っている有名な魚だけでなく、その大きさは 3 m にもなり、大型水槽を飾る主役として申し分ない要素を持っている。しかも、当地串本では 2004 年に近畿大学水産研究所により完全養殖が成功しており、話題性も抜群と思われた。

トンネル水槽でクロマグロを飼育しようとすると大型ザメの存在のような問題点が多々考えられ、これまでは実現されなかった。もう一つの大きな障害が、高速で遊泳するマグロ類は丸い水槽でなければ飼育が難しい上、中央に大きなトンネルがある水槽では衝突が避けられないものと考えられていた。

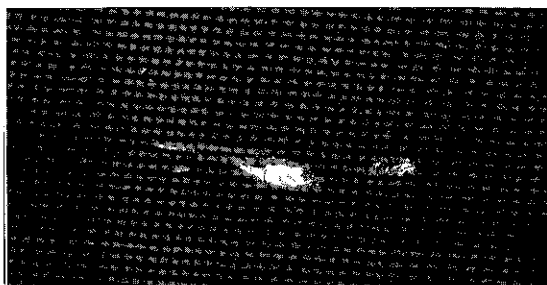
さて、5 月 31 日にクロマグロを地元の養殖業者から購入することができた。海上の生け簀から、全長 70 ~ 80 cm、体重 7 kg ほどのマグロを 6 個体釣り上げて、船で港まで運び、その後は活魚トラックで水族館まで運んだ。水族館までの所要時間は約 1 時間だったが、水族館入口から水槽下までの細い道をトラックがなかなか通れず、30 分以上のロスタイムが出てしまった。しかしながら、水槽への搬入は慣れた養殖業者が行ったために順調にはかどり、6 個体を無事に水槽へ入れることができた。多少のスレによる傷があるものの、状態は良く、6 個体が群れになり、他の魚類とは異なる高速遊泳が見られた。また心配された衝突もすぐには起こらず、トンネルも見事に避けて泳ぎ続けた。

餌については、養殖場で与えられているマル

アジを与えれば、餌付きが早いものと思われた。しかし、10 cm ほどのマルアジは全く見向きもされず、毎日違った魚（マイワシ、ゴマサバ、キビナゴ）を与えてみた。そして 5 日目にイカナゴを与えたところ、先頭を泳ぐ 1 個体のみが少量を食べた。6 日目には 3 個体が食べることを確認できたが、最初に食べ始めた 1 個体以外は少量しか食べていないように見えた。餌は他の魚たちにサバぶつ切りを水槽中央付近で与えながら、端で沈んでいくイカナゴが常にある状態を保てるように少しずつ撒いて与えた。それから 1 週間もすると、イカナゴだけでなく他の魚に与えているぶつ切りの魚を何でも食べるようになり、今ではサバが大好物となっている。

なお、全く餌を食べないまま搬入から 4 日目の朝、1 個体が死亡した。また、餌を食べ始めてからの 10 日目と 26 日目に各 1 個体が死亡した。3 個体目以外は死体を確認していないが、衝突などで動きが止まったところを同居しているメジロザメ（全長 1.7 m 程）に捕食されたものと考えられた。死体の手に入った 3 個体目は全長 67 cm 体重 5 kg で、当時残っていた 4 個体のうち最も小さな個体であった。死因は衝突と考えられるが、解剖してもそれらしい根拠を発見することはできなかった。

その後は順調に飼育できているように見え、餌を撒くとそのスピードを生かして真っ先に餌を食べるようになった。なお、飼育し始めた 70 cm のクロマグロは満 2 歳であり、3 歳で 1 m、5 歳で 1.5 m、8 歳で 2 m に成長する。まだまだ小さくカツオと間違われることもあるクロマグロだが、早く誰もがマグロと認める大きさまで育ってほしいものである。



POLYCHAETOLOGICA (42)

各科の属の検索と種の説明 (27)

チロリ科 No. 7

内田 紘臣

前回はチロリ科の第1属 *Glycera* の第3グループの種の紹介の2回目であった。今回はこのグループに属する種の紹介の最後である。

***Glycera rouxii* Audouin et Milne-Edwards, 1833**

(イソチロリ 奥田, 1947)

本種はマルセイユのナチュラリストであった Roux 氏が自分の町の海岸で採集し、キュビエに送った標本が、キュビエから上記の命名者の2人に託されたものである。記載当時本種はエラをもたないのが特徴であった。種名はもちろん採集者のルー氏に献名されたものである。

デンマークの Örsted (1843) は本種を記載したが、疣足にはエラが認められた。エラの有無は種を分けるに十分な形質であるので、後年 Malmgren (1867) は Örsted の記載したものに對して、*Glycera Goësi* という名を与えて新種とした。彼が本種の記載に用いた材料の一部を採集した Goës 氏に献名した名である。

ところがさらに後年よく調べられた結果、この2者にはエラの有無以外に違いがなく、また本種のエラはあまり顕著に翻出しないことがわかり、Audouin et Milne-Edwards (1833) の標本は単に全てのエラが翻出していないものとの結論に達し、両者はシノニムとされた。

ヨーロッパから北アフリカの大西洋沿岸と地中海、インド洋熱帯域と、極東の中国・日本に分布する。しかし後に出てくる *G. decipiens* との混同もあり、正確な分布はなお不明である。

Moore (1903) はアメリカのアルバトロス探検の多毛類の報告で、*G. goesi* を駿河湾、水深13~65 尋と仙台湾およびそれ以北の東北沿岸、水深14~57 尋から報告しているが、本人も記しているとおり、*G. decipiens* との違いを見いだせなかったようだ。続いて Izuka (1912) は同種を東京湾・神奈川県三崎・福井県・北海道稚内から記録し、さらに *G. decipiens* を本種のシノニムとした。Izuka (1912) の図は体前部の

疣足の後足葉の腹側足葉の先が尖っている。

本種と次種とは混乱があり、詳しい事情については次種に述べるが、永年多毛類分類の教科書的存在であった Fauvel (1923: フランスの動物相—多毛類遊在類) にリングのない長突起の図があり、それがもとの、混乱が起こっているように思える。本種の長突起には図示したような明瞭なリングがある。

少なくとも本種と認められるわが国の記録は次のものである。Izuka (1912) に挙げてある図は本種のものである。しかし、上記4箇所の記録の内、全部が本種に当たるかどうかは不明で、多分両種を含んでいるものと思われる。また Okuda & Yamada (1954) が松島湾から記録した *G. rouxii* も後述のように本種を指している。

筆者の手元には白浜町椿の砂底からの1個体の標本があるのみ。

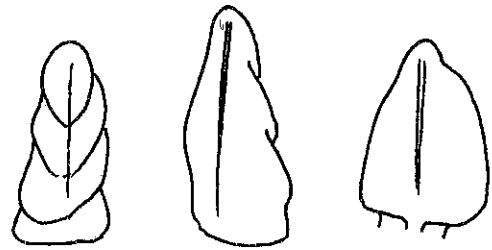


図1. 口吻上の長突起 (左2図: 正面と側面) と短突起 (右図)

***Glycera decipiens* Marenzeller, 1879**

Dr. Koerbl が三重県桑名の官湾で採集した9個体と、Dr. Roretz が横浜以南で産地不詳の南日本 (Vol. 32: 37 参照) で採集した1個体の標本をもとに記載された。そのうち完全なものは1個体のみで、それは175 体節、全長58 mmであった。本種の原因記載の図には非常な特徴がある。すなわち、体前部の疣足の腹側前足葉は背

側前足葉より短くかつ先が丸い。一方後足葉は背腹両足葉ともほぼ同じ大きさで、両方とも先が尖る。この関係は、通常の種の疣足の形態とは前後が全く逆である。しかし、原記載以後、このような特殊な形態の疣足をもった個体の記録はなく、また多くの人が、本種を *G. rouxii* のシノニムと考えているところからも、この図は前後を間違えて表示したものと考えられる。

前種の項で書いたように、Moore (1903) は本種を *G. goesi* (現在は *G. rouxii* のシノニム) とした。Izuka (1912) はそれにならったが、これに添えられている体前部の疣足の図では、既に指摘したように、腹側後足葉は *G. decipiens* と異なり、*G. rouxii* のように短く丸い。しかし、Moore (1903) には図が添えられてないので、Moore の標本が *G. decipiens* なのか *G. rouxii* なのかは不明である。

Fauvel (1932) はインド博物館の多毛類の報告の中で、本種を *G. rouxii* のシノニムとし、Fauvel (1936) は *G. rouxii* を和歌山県田辺湾不知網、12 尋から報告したが、これにも図がついていず、かつ疣足の足葉についての記述がないため、この田辺からの標本がどちらに属するかは不明である。

奥田 (1938) は知多半島産の *G. rouxii* 1 個体を報告しているが、添えられた体前部疣足の図によれば、腹側後足葉は先が丸く、明らかに本種すなわち *G. decipiens* を示している。しかし口吻の突起は明らかにリングを欠くので、前述したように、これは *G. mcintoshii* と同定される。

さらに奥田 (1947: 日本動物図鑑増補改訂版) で *G. rouxii* を書き、これにイソチロリという和名を与えた。ここには簡略な記載と図があり、図には全形と、体前部・体後部疣足の 3 葉が掲げられている。全形は本人の原図か他からの引用かはわからないが、疣足は間違いなく Fauvel (1923: 上述) の *G. rouxii* の疣足の図をそのまま引き写している。チロリの仲間の全形はどれもほとんど同じような外形をしてるため、全形は本属の全ての種にほぼ当てはまることになり、問題は疣足の形状である。そして、この疣

足が Fauvel (1923) の *G. rouxii* (模式産地は前述のようにフランス) をそのまま引用しているので、和名イソチロリは本種ではなく前種に与えられるべきものであることは明白である。

Okuda & Yamada (1954) は *G. rouxii* 1 個体を松島湾から記録している。これには図はないが、疣足の後足葉では背腹両足葉は共に先が尖るが、腹側足葉の方が短いとある。それ故、この標本は *G. decipiens* ではなく、*G. rouxii* の特徴を持つことがわかる。

本種の特徴は、*G. rouxii* と同じく、エラの出がすこぶる悪く、生きている個体の観察からも、容易にエラを欠く種と判定される。

なお、第 3 グループの種の検索表 (Vol. 35: 4-5) の No. 7 の右図は本種の体前部の疣足を示し、No. 8 の右図は本種の体後部の疣足を示したものである。

筆者の手元には潮岬北西沖、水深 30-40 m ドレッジによる 1 個体のエラが翻出した標本があるが、その他、串本海域の砂底、水深 40-120 m と串本町古座海岸、水深数 m から一見エラを欠く種のように見える 18 個体が得られている。その他にも三重県五ヶ所湾、和歌山市和歌川河口干潟、白浜町伊勢ヶ谷湾、徳島県那佐湾奥、長崎県大村湾からのエラが出ていない 40 個体の標本があり、これら両群に目立った違いはないが、生息環境を考えれば、浅海～深い砂底から得られたものと、内湾の泥干潟に産するものとは種が異なる可能性が高い。

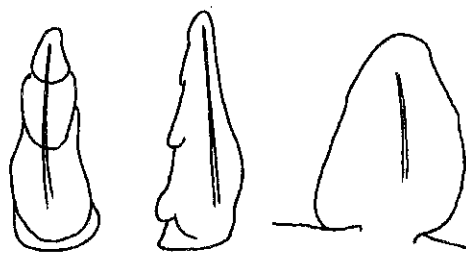
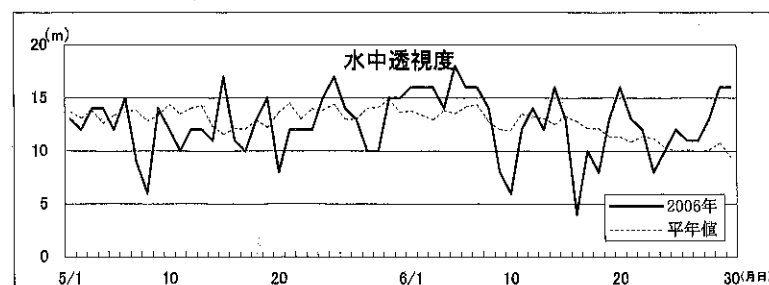
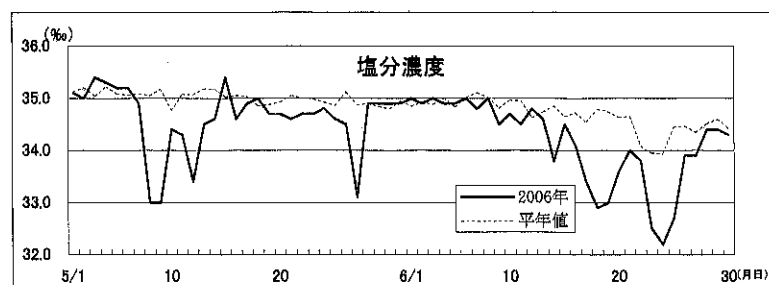
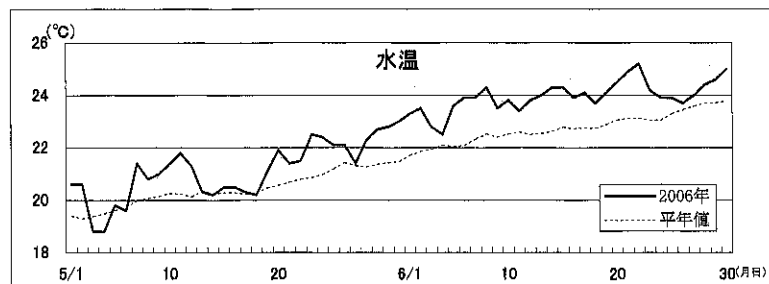
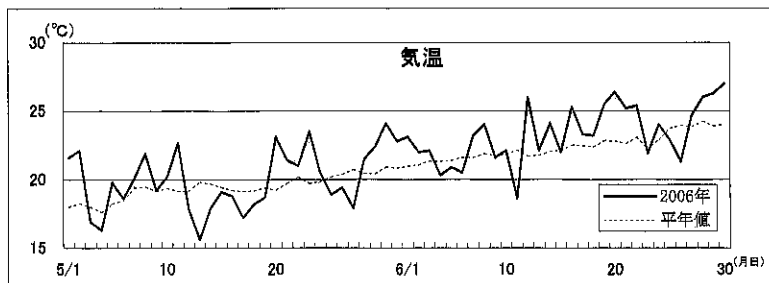


図 2. 口吻上の長突起 (左 2 図: 正面と側面) と短突起 (右図)

鯖浦の海から

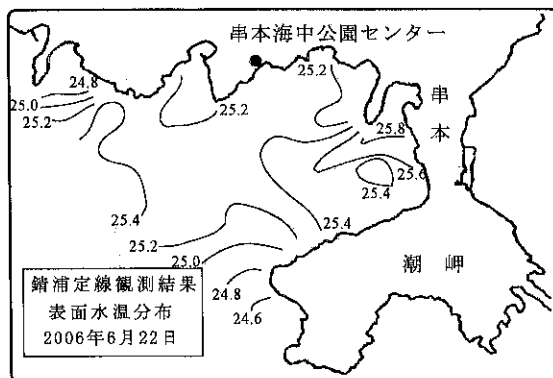
森 美枝

平均値	5月	気温20.0℃	水温21.1℃	塩分濃度34.6‰	水中透視度12.4m
	6月	気温23.4℃	水温24.0℃	塩分濃度34.1‰	水中透視度12.7m



およそ 10 年ぶりに東京に行く機会があった。白浜空港から飛行機に乗り 1 時間もすると眼下には大都会の街並みが広がる。旋回する飛行機から江戸前と呼ばれる海が見えたが、幾何学模様の海岸に墨を流したような海を見て、智恵子ではないが「東京には海が無い」と思った。一転、帰路空から見る紀南の風景は東京とは正反対で、視界のほとんどは山ばかり。そして山のすぐ隣には青い海があった。

『森は海の恋人』（畠山重篤著）という本がある。森が荒れると海も荒れるという。なるほど森が無くなってしまった都会に海が無いのは仕方がないのかもしれない。紀南の海が美しいのは開発に取り残された山がそれを守っているからだと思う。紀南一円を担う最終処分場の計画が持ち上がっている。山を削って造られる処分場の候補地はすでに 5 カ所に絞られており、そのうち 2 カ所は昨年ラムサール条約に登録されたこの鯖浦の海の目の前である。山が荒れるだけでなく、汚染水の流出も心配である。紀南でも特に優れていると認められた海が紀南で一番リスクを背負う海になってしまうのだろうか。



マリンパビリオン Vol.35, No.4 通巻388号

年 6 回発行 一部100円
(年間購読料1,000円/送料含む)
発行日 平成18年7月31日

編集兼発行人

〒649-3514 和歌山県東牟婁郡串本町有田1157
(株) 串本海中公園センター
電話 & FAX 0735-62-4875
ホームページ <http://www.kushimoto.co.jp/>
印刷所 坂本印刷